

本田財団レポート No. 158

第 134 回 本田財団懇談会（2015 年 6 月 29 日）

「ライフスタイル変革のイノベーション」

東北大学大学院環境科学研究科 准教授

古川 柳蔵

公益財団法人 **本田財団**

講師略歴

古川 柳蔵 (ふるかわ りゅうぞう)

東北大学大学院環境科学研究科 准教授
(専門：環境イノベーション)



《略 歴》

- 1996年 東京大学工学部材料学科卒業
- 1998年 東京大学大学院 工学系研究科材料学専攻修了
民間シンクタンク入社
- 2005年 東京大学大学院 工学系研究科先端学際工学専攻博士課程修了、
博士 (学術)
東北大学大学院 環境科学研究科高度環境政策・技術マネジメント
人材養成ユニット 助教授
- 2010年 東北大学大学院 環境科学研究科国際環境・地域環境学講座 環境
技術イノベーション分野 准教授
- 2015年 東北大学大学院 環境科学研究科先進社会環境学専攻環境政策学講座
イノベーション戦略学分野 准教授・現職

《主な受賞歴》

- 2013年 グッドデザイン賞受賞。グッドデザイン・ベスト 100 に選定。
特別賞「グッドデザイン・未来づくりデザイン賞」受賞
第3回生物多様性日本アワード優秀賞受賞
- 2014年 グッドライフアワード 環境大臣賞・グッドライフ特別賞受賞
- 2015年 仙台市自作視聴覚教材審査会社会教育部門 優良賞受賞

ほか多数

《主な著書・共編著》

- 2010年 『環境制約下におけるイノベーション』 (東北大学出版会)
- 2012年 『90歳ヒアリングのすすめ』 (日経BP社)
- 2013年 『2030年のライフスタイルが教えてくれる「心豊かな」ビジネス』
(日刊工業新聞社)
『Nature Technology - Creating a Fresh Approach to
Technology and Lifestyle』 Emile H. Ishida, Ryuzo Furukawa
(Springer)
- 2014年 『地下資源文明から生命文明へ 人と地球を考えたあたらしいもの
つくりと暮らし方のか・た・ちーネイチャー・テクノロジー』
(東北大学出版会)

ほか多数



ご紹介いただきまして誠にありがとうございます。東北大学大学院環境科学研究科の古川です。今日はこのような機会をいただきまして、本当にありがとうございます。

今日は地方の話をしたと思っていますが、私は東京生まれ東京育ちで、10年前に東北大学へ移って、そのあと環境イノベーションの研究をしてきました。仙台に行って気づいたのは、牛タンのおいしさ、ではなくて、自然が豊かだということです。仙台、宮城は牛タンというより、むしろ魚介類、海藻がおいしいわけですね。そういうことを全く知らずに仙台に行った私は、大きくその価値観が変わりました。

それ以降、日本の地方を回ることが多くなり、私の知らない昔からこの日本に伝えられてきた価値観、それから自然そのものがまだ残っているところがあります。そういう気づきがありました。その中で、今日、話をする前に一つご紹介したいことがあります。

来年サミットが開かれることが決まった、三重県の伊勢志摩に行ったときに聞いた話です。あそこは真珠の養殖が盛んで、例えば御木本^{みきもと}ですとか、きれいな和珠^{わだま}を作っています。その養殖をしている現場の方に話を聞いて驚きました。最近の地球温暖化で海水温が上昇し、その影響を受けているという話です。養殖をしている英虞湾^{あづ}では従来使っていた貝の質を維持できなくなって、中国から貝を輸入して交配し、強い貝を使うようになったそうです。28度を超えると質が低下し、30度を超えると多くの貝が死んでしまう。あのあたりでも最近海水温がときどき30度超えるらしく、大きな被害を出している。そういう状況が伊勢志摩で起こっているということを、私は行くまで知りませんでした。環境問題の研究をしている私が知らなかったのです。

地球温暖化という問題も、われわれの暮らしのそばまで迫っているということが事実としてあって、そういう危機迫る状況に今きていることを知った次第です。

■ 制約なき豊かな暮らしの追求と地球環境問題

今日、お話をしたいのは、「ライフスタイル変革のイノベーション」というタイトルですが、地球環境問題を出発点に話したいと思います。

地球環境問題を技術で解決することは、今までかなり多くの挑戦がなされ、達成して、ある程度の成果を出していると思います。けれども暮らし方を変えることにより環境負荷を下げる取り組みは、まだ他ではされていません。今日は暮らし方を変えることによって環境問題を解決に導く、そういう変革、イノベーションを起こすために何を考えるべきかという話をさせていただきます。

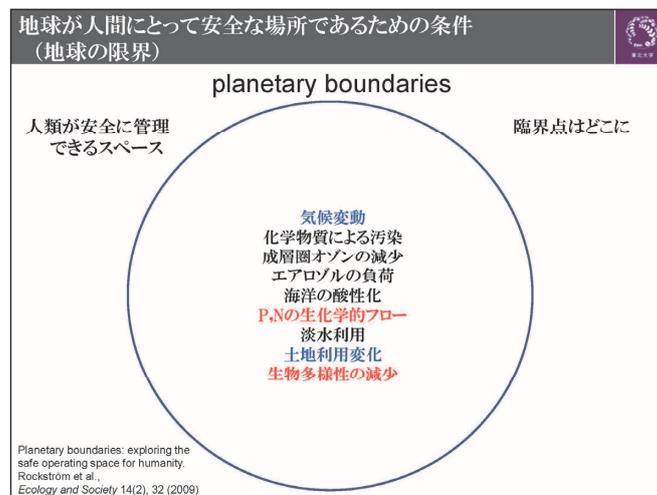


図-1

〈図-1〉 世界的には、この planetary boundaries ということが環境問題の中で研究されています。これは地球が人間にとって安全な場所であるための条件があって、その条件を超えてしまってもう元に戻れない、安全な地球ではなくなる、そういう境界点があるだろうと指摘する論文が 2009 年に出ました。この考え方は、その境界を越えなければ自由に何をしてもいいとまでは言わないまでも、そういう価値観が背景にある論文でした。われわれ、おそらく日本人としては、それはちょっとおかしいのではないかと。どこかに境界点があるが、そこを超えなければ何をしてもいいかと言うと、それは違いますよね。

われわれ日本は、実は今まではこの条件を意識せずに制約なき豊かな暮らしを追求してきました。そもそも、われわれ日本も地球全体も、そういう境界点を意識しないで進んできているわけです。

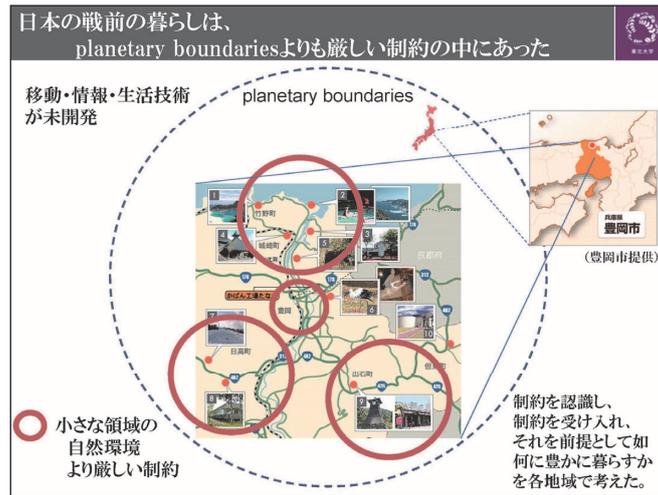


図-2

〈図-2〉 過去に少しさかのぼって、戦前の暮らしはどうだったかという、先ほどの境界線よりももっと厳しい制約の中で暮らしていた過去があります。その理由は移動手段がまだ歩きしかなかった。それから情報、生活技術、そういうものがほとんどなくて、やむを得ずというのが正しいのかもしれませんが、ある地域の中で、限られた資源の中で豊かに暮らすということを考えていたわけですね。その planetary boundaries よりもはるかに厳しい条件のもとで、豊かな暮らしを見つけてきた。それが戦前の暮らしです。その制約をわれわれ日本人は認識していました。認識をして、それを受け入れて、それを前提としていかに豊かに暮らすかを考えて、戦前の暮らしがあったのです。

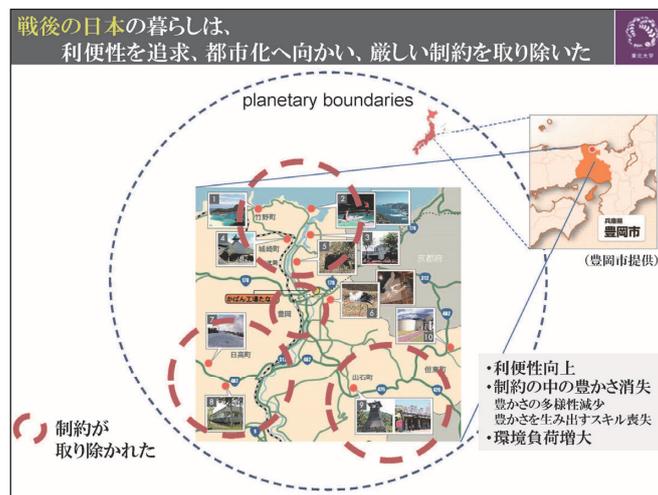
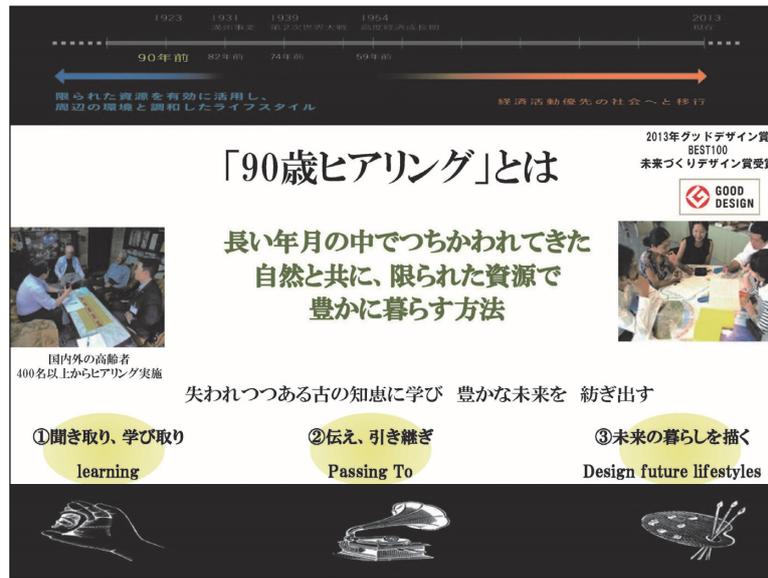


図-3

〈図-3〉 ところが戦後の日本は技術が発展しました。その結果、移動ができるようになり、生活が便利になりました。利便性は向上し、この制約が取り除かれたわけです。その結果、残念ながら、この制約の中の豊かさというものが失われています。豊かさの多様性も失われていますし、豊かさを見つけるスキルも失われている。さらに環境負荷が増大してしまいました。これが戦後、われわれ日本が歩んできた道です。

■ 90歳ヒアリングから見た戦前の暮らし



図－4

〈図－4〉 戦前の暮らしについて、今日、お越しいただいている方はもしかしたら私よりもはるかになじみがあるのかもしれませんが。今までこの戦前の暮らしというより、厳しい制約下の豊かな暮らしとは何かを明らかにするために、日本全国 41 都道府県、合計 450 人以上の 90 歳前後の方に、戦前の暮らしについてヒアリングをしてきました。始めたのは 2009 年ごろと思います。もう 6 年ほど経過しましたがけれど、その当時 90 歳であった人が対象だったので、「90 歳ヒアリング」という名前を付けました。

私が知りたかったのは戦前の暮らしです。戦前の暮らしについて、大人の目線で経験して、見てきた人にヒアリングをしたいと思って、ちょうどそのとき彼らが 90 歳ぐらいだったので、90 歳ヒアリングと名付けて継続してきました。

いろいろな方に誤解されますが、よく、「昔のいい知恵、おばあさんの知恵袋を見つけるのか」と言われるのですが、違います。制約の中で豊かに暮らすための知恵、仕組みを過去から学びたい、そして未来を描く、未来の日本を考えていくために応用したい。それが、90 歳ヒアリングのもともとの目的です。

北は北海道から、南は九州まで歩いて回りました。一人 2 時間ほどヒアリングをします。90 歳の高齢者ですから、3 時間も 4 時間もお話をされるとダメージが大きいだろうと、そういうことで 2 時間と設定していますが、実は 2 時間は短い。むしろ 90 歳の方々は話をしているうちに元気が出てきます。2 時間では全然物足りない。むしろ、私がエネルギーを吸い取られていく。こういう構図です。



- 1) 自然資源を共有して助け合う暮らし方(薪)
- 2) お客様を手作りでおもてなしをする暮らし方(おはぎ)
- 3) 水を共有して大事に使う暮らし方(せぎ)
- 4) 自然に合わせて行動する暮らし方(種まき地蔵)
- 5) 自然の中に遊びを探す暮らし方(昆虫、うさぎ)
- 6) 女性が80歳まで働き、男性が助ける暮らし方(海女さん)
- 7) 外の空間で集い、語らう暮らし方(井戸端、湧き水)
- 8) 最後まで使い尽くす暮らし方(ぼろを作業着に)
- 9) 役割を与えて伝える暮らし方(子供の手伝い)
- 10) 多様性を食する暮らし方(25種の山菜鍋)

図-5

〈図-5〉 それをずっと続けてきて、多くの自然と共に生きるための知恵が見つかりました。きょうは簡単な10の事例をご紹介しますと思います。

一つ目、特に東北地方、北のほうで多いのですが、自然資源を共有して助け合う暮らしをしていました。例えば燃料は薪です。まず、山を共有します。共有山を持って共同で薪を切る。そして共同の木小屋にその薪を保存する。それを1年間保存して、共同で使っていく。「こういう暮らしが豊かだね」と、90歳のおじいさんが言っていました。

それから二つ目、お客様を手作りでおもてなしをする暮らし方。これは私が体験したのですが、宮城県の白石市のおばあさんに話を聞きに行ったときに、おはぎを二つ出してくれました。結構大きなおはぎを、「おいしい、おいしい、ありがとうございます」と食べていたら、「そのおはぎ、そういえば去年、病院を抜け出して様子を見に行ったんですよ」と。台風が近づいていたらしいのです。私は「ああ、そうですか」と言いながらも、おばあさんが何を言っているのかさっぱりわからなくて、よくよく聞いていると、おばあさんはその夏、おはぎの小豆を育てていて、台風が来たときに、それが倒れてやしないかと入院した病院から抜け出て探りに行ったという話でした。

私は東京生まれなので、出てきたおはぎを自分で握ったならわかりますが、小豆まで自分で作ったというストーリーと一緒におもてなしされたことは初めてで、これはすごい世界だなと思いました。

三つ目が水を共有して大事に使う暮らし方。せぎと呼ばれているものが秋田県にあります。通常、水を集落で共有することが多いのですが、その地域は、驚いたことに家の中に水を通していくんです。水が上流から各家の中を通過して下流へ行く。使うときはすくって、別にとってそれを使うと、下流の人たちに迷惑をかけない。こういう使い方をするわけですね。水を使いながら、水を大事にする、他人に迷惑をかけないという価値観も子供に教育できる仕組みです。

四つ目。自然に合わせて行動する暮らし。これは割と日本全国共通してあります。「種まき地蔵」というのは、蔵王の雪形が「種まき地蔵」の形になったら種をまくタイミングですよ。これは自然の気候に合わせて暮らしを考えているということです。

五つ目。自然の中に遊びを探す暮らし方。単純なようですけれども、ものすごい豊かさがある。自然の中に入って行くと生き物がいます。生き物と知恵比べをするんです。これは豊かです。

六つ目。女性が 80 歳まで働き、男性が助ける暮らし方。これは三重県の海女さんです。女性が稼ぎ頭になっている。海女さんはものすごく稼ぎがいいのです。潜ってアワビとかを獲るわけですね。特にアワビがいいのだと思います。要は一家を支えるのが海女さんであって、それをサポートするのが男、夫なんです。しかも 80 歳まで女性が働き続ける。80 歳まで潜るのです。今、われわれの仕事で 80 歳まで働いている人はなかなかいませんよね。これはどういう謎なんだろうか。おばあさんに聞くと、「いやあ、海はきれいだからね」と、その一言です。潜ると海がきれいで、それがやめられない理由だそうです。

七つ目、外の空間で集い、語らう暮らし。日本の多くの地方で失われているのは、この集いの場です。家の中で集う、公民館で集うのは今でもありますけれども、ヒアリングした方々は「外の集いの場が消えてしまっている。これはすごく寂しい」と言っています。

昔は井戸の水を汲みに井戸端に行って、そこで偶然会った近所の人たちとペチャペチャしゃべって憩っていた。特に女性がリラックスして集える場だったと聞きます。そういうふうに昔は何か必要性があったんですね。外に行く必要があったから行った。その結果、物理的に豊かな暮らしを得ていたということが多いようです。

八つ目。最後まで使い尽くす暮らし。ボロ布が出たらそれを箱にためておきます。ある程度たまったら、「これで作業着を作ろう」と。それを考えるのが面白いと言っていました。

九つ目、役割を与えて伝える暮らし方。家族には全てに役割があります。子供から大人まで役割があって、その役割を果たして豊かになれるわけです。成長する上でその役割は徐々に変わっていきます。成長し終わったら、暮らしが全てできるようになっている。こういう伝承の仕方をしているわけです。

最後の 10 個目。多様性を食する暮らし。これは秋田ですが、山の奥に住んでいる方で、日本全体で見ると、比較的貧しい地域でした。そこで山菜鍋を作るということで、鍋の中に 23~25 種類の具を入れます。プロに聞くと、ある一つの季節で 25 種類そろえるのは結構大変だから、おそらく漬物とか、別の季節にとったものを入れているんじゃないかと言っていました。そこまでして多様な鍋を作って人をもてなす暮らしをしているわけです。こういうふうに限られた資源の中でも豊かに暮らす方法を、彼らは考えていました。

■ 戦後、失われつつある価値

戦後、失われつつある価値	
1. 自然と寄り添って暮らす	23. 分け合う気持ち
2. 自然を活かす知恵	24. つきあいの楽しみ
3. 山、川、海から得る食材	25. 人をもてなす
4. 食の基本は自給自足	26. 出会う場がある
5. てまひまかけてつくる保存食	27. 祭りや市の楽しみ
6. 質素な毎日の食事	28. 行事を守る
7. ハレの日はごちそう	29. 身近な生と死
8. 野山で遊びほうける	30. 大勢で暮らす
9. 水を巧みに利用する	31. 家族を思いやる
10. 燃料は近くの山や林から	32. みんなが役割を持つ
11. 家の中心に火がある	33. 子どもはたたく
12. 自然物に手を合わせる	34. ともに暮らしながら伝える
13. 庭の木が暮らしを支える	35. いくつもの生業を持つ
14. 暮らしを映す家のかたち	36. お金を介さないやりとり
15. 1年分を備蓄する	37. 町と村のつながり
16. 何でも手づくりする	38. 小さな店、町場のにぎわい
17. 直しながら丁寧につかう	39. 振り売り、量り売り
18. 最後の最後まで使う	40. どこまでも歩く
19. 工夫を重ねる	41. ささやかな贅沢
20. 身近に生き物がいる	42. ちょっといい話をする
21. 暮らしの中に歌がある	43. ちょうどいいあんばい
22. 助け合うしくみ	44. 生かされて生きる

図－6

〈図－6〉 昔の人たちが考えてきた持続可能で心豊かに暮らす暮らし方の中には、細かく分けるといろいろな価値があります。分析するときりがないのですが、今日は時間も限られていますので、戦前の暮らしの中であって、今の暮らしの中から失われつつあるものを44個ピックアップしてみます。

昔は自然と寄り添って暮らしていました。

そして自然を活かす知恵というものがありませんでした。

食材は山、川、海からとって、基本、食は自給自足です。

手間暇かけて保存食をつくります。

質素な毎日の食事ですけども、ときどきハレの日はごちそうです。

野山で遊びほうける。

水を巧みに利用しています。

燃料は近くの山や林からとってきます。

今はなくなりましたが、家の中心に火があります。

自然物に手を合わせ、感謝をします。感謝の気持ちを忘れていません。

庭の木が暮らしを支えています。庭の木がおやつでした。もしくはサイカチという木の実を使って石鹸にしていたというのが仙台のほうでもあります。

暮らしを映す家のかたち、暮らしにとって合理的なかたちに家が設計されています。

1年分備蓄します。

何でも手作りする。

直しながら丁寧に使う。

最後の最後まで使って、工夫を重ねています。

身近に生き物がいる。

暮らしの中に歌があります。労働歌もそのうちのひとつだと思います。

もちろんですけども助け合う仕組みがあって、分け合う、そういう気持ちがある。

付き合いの楽しみ。

人をもてなす。

そして出会いの場がありました。

祭り、市、これが楽しみでした。

行事を守る。

身近な生と死。死が身近でした。新しく生まれてくる命もありました。

大勢で暮らしています。

家族を思いやって、みんなに役割がある。

子供も働いています。

そして共に暮らしながら、それを伝えていきます。

いくつもの生業を持っています。これはものすごく持続可能な仕組みで、例えば半農半窯と言われるものがありますが、窯焼きをして、農業もやっている。自給自足をしているので、万が一何があっても食っていける。なので、商品にあまり市場がなくても知恵や技術を継続できるという仕組みです。

お金を介さないやりとり。

町と村のつながり、それを大事にします。

小さな店、町場のにぎわい。

振り売り、量り売り。このへんは有名です。

どこまでも歩いています。20キロぐらい歩きます。

ささやかなぜいたくを喜ぶます。

ちょっといい話を話して、楽しんで、ちょうどいいあんばいというのがわかります。

生かされて生きる。

これらの価値観が昔はありましたが、今は薄れています。

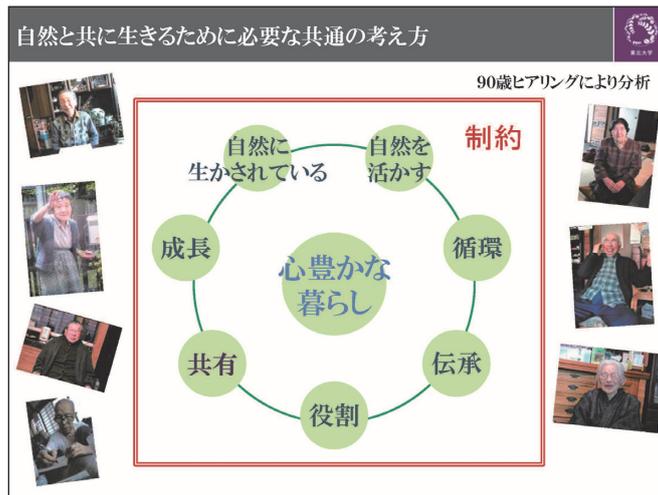


図-7

〈図-7〉 まとめる意味はあまりないですが、われわれ日本がずっと維持してきた自然と共に生きるために必要な、共通な考え方というものが見えてきます。

自然に生かされている、自然を活かす、循環、伝承、役割、共有、成長、これらがある制約の中で、暮らしをすごく豊かにしていたわけです。

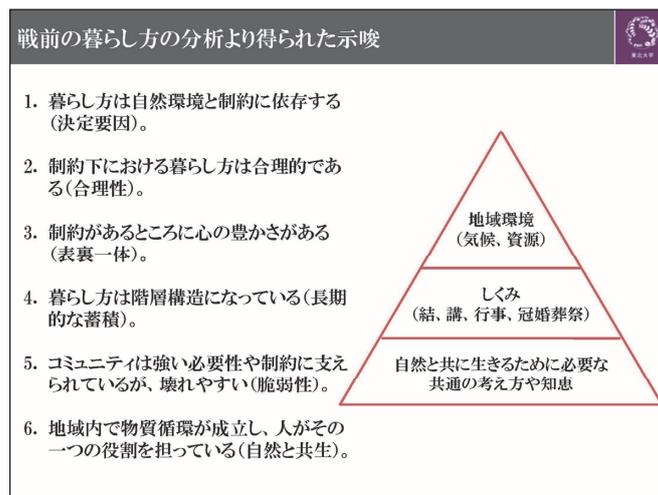


図-8

〈図-8〉 こういうことがわかってきて、戦前の暮らし方を分析して得られた示唆が六つあります。

ものすごく重要なことですが、一つ目、暮らし方は自然環境と制約に依存する。地方へ行くと分かるのが、ある共通した自然環境の中で暮らしている人たちは同じ暮らし方をしています。山を一つ越えると、別の自然環境になって、その人たちは別の暮らし方をしています。ただ、その自然環境にいる人たちはみんな同じ暮らし方をしています。まさに、自然環境に大きく依存している暮らしです。

二つ目、暮らし方が合理的です。必ず全てに理由があります。こういう暮らし方をしているのは、こういう理由があるからですと、暮らしが合理的に成り立っています。

三つ目、制約があるところに心の豊かさがあります。私は心の豊かさを探していったのですが、わかったのは、制約のあるところに豊かさがあるということです。制約がないところに豊かさは無いことが共通してわかりました。

四つ目、暮らし方は階層構造になっています。1 番下にあるのが自然と共に生きるために必要な共通な考え方。その上に、結とか講と呼ばれる仕組みがきます。最後に、その地域の環境、気候、資源、そういうものが合わさり、暮らし方が決まっている。こういう構造になっていることがわかりました。おそらく長期的に蓄積されて、この構造に至っているんだろことが察せられます。

五つ目、コミュニティは強い必要性や制約に支えられています。ただ、壊れやすいです。

今、地方へ行くとコミュニティが壊れそうなところがいっぱいあります。きっかけは、ほんの小さいことです。外で集う場所が、井戸端がなくなって会う頻度がすごく減っていきました。全く会わないわけではないけれど、そのコミュニティから離れていく感覚です。これがもう今にも壊れそうなところまでできています。一度壊れたら、コミュニティを復活するのは大変です。今、そのような危機的状況になっていると思います。

六つ目、地域内で物質循環が成立しています。そして、人がその循環の役割の一つを担っています。先ほどの価値観を満たす以外に、物質循環までできている。これが戦前の暮らしです。

この 90 歳ヒアリングは、450 人以上やってきました。アメリカもロサンゼルス、ドイツもベルリンに約 1 週間ぐらい滞在してヒアリングをしました。まだはっきり言えませんが、日本の特徴はやはりコミュニティの強さだと思います。

自然と共に生きるための知恵、自然と共に生きるために必要なものは、海外も共通ですよ。けれど、コミュニティとして助け合うという考え方は、割と日本のほうが色濃く、強いと思います。ただ、日本全体にあるわけではないこともわかっています。やはり自然環境が厳しいところで、より強いコミュニティが築かれているのだろと思います。

少し時間をかけて戦前の暮らしについて見てきましたが、私たちは戦前の暮らしに戻ろうということではありません。ただ、見直す必要があるだろと。

■ ライフスタイルの淘汰と価値観の変化

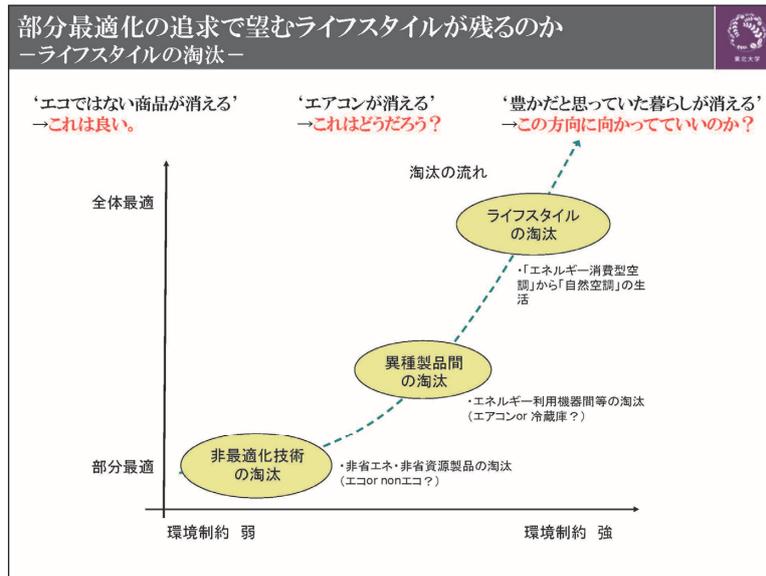


図-9

〈図-9〉 環境イノベーションの現状を分析すると、考えなければいけないことがいろいろ見えてきます。今のイノベーションは、例えばエアコンだったらエアコンがエコになるような技術開発がされている。自動車だったら自動車がエコになるような技術開発がされている。これが今のイノベーションの方向です。部分最適化です。それを積み上げていくと、環境的に最適かという谁也分からない。こういうイノベーションが起こっています。まだ1番左下にいる環境制約が弱い状況において、その部分最適化を目指した技術開発が進んでいるわけです。

最近は電気代が安いとかのメリットがありますのでエコなものが選ばれ、エコでないものが淘汰されていく世界になりつつあります。

それが、やがて環境制約が厳しくなってくると何が起こるか。今度は全体最適化のイノベーションが起こります。エアコンと冷蔵庫が競い合うわけです。家庭内で同じエネルギーを使っている機器同士で、どちらを捨てようか、残そうかと考えるときがくるわけです。もっと環境制約が厳しくなれば、最終的にはおそらくライフスタイルが競争し合うことになるでしょう。

この考え方はわかると思います。問題は、環境制約が厳しくなったときに本当は望んでいたライフスタイルが、ある技術が途中で淘汰されてしまったことによって実現できなくなる可能性があるということです。つまり、部分最適化を一步一步進んでいくと、最終的には本当に望むライフスタイルが実現できなくなる可能性があるわけです。そうならないためには、全体最適化のイノベーションを考えなければいけないということがわかります。

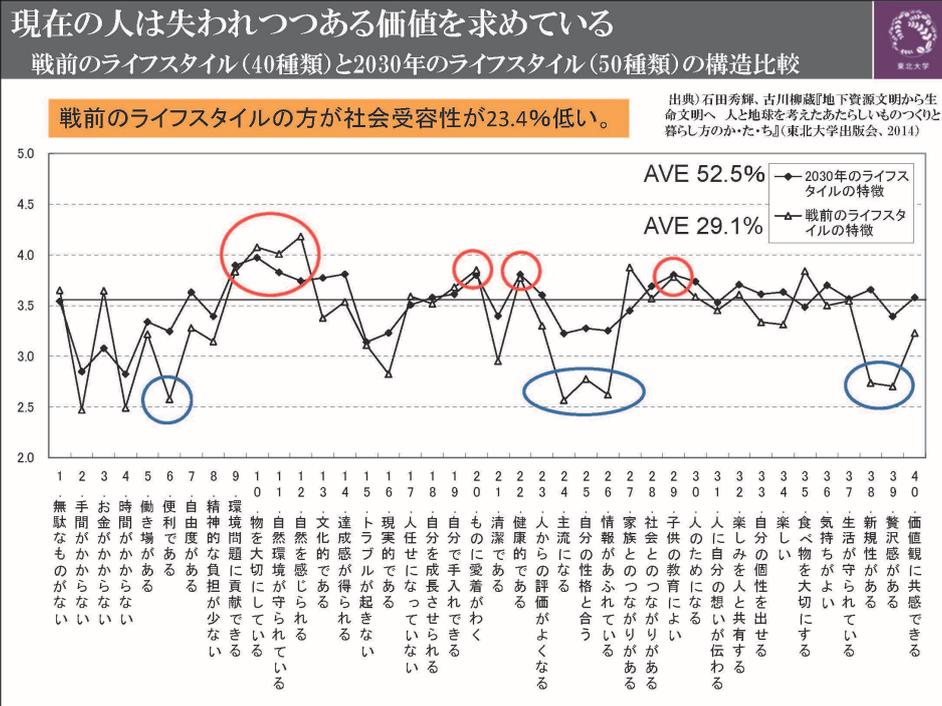


図-10

〈図-10〉 二つ目の大きなトレンドとして、現在の人は、先ほどの「失われつつある価値」を求めています。こういうデータがあります。このグラフは、戦前のライフスタイルの特徴をプロットしたものです。黒い四角のグラフは、2030年のライフスタイルの特徴と書いていますように、今の人たちが2030年、こんなライフスタイルを望みますというライフスタイルを50個描き、その平均的な構造を示しています。

このグラフの赤い丸からわかるのは、例えば「環境問題に貢献できる」「物を大切にする」「自然環境が守られている」「自然を感じられる」、これらは戦前にも存在していますし、今の人たちも求めているものです。他にもあります。ところがこの青い丸のところを見てほしいのですが、「便利である」。これは昔にはないけれど、今、求められているものです。「主流になる」「自分の性格と合う」「情報があふれている」「新規性がある」「贅沢感がある」、こういうものを、今の人たちは求めていますけど、戦前にはなかった。

ここからわかるのは、今の人たちは「昔に戻りたくない」とよく言うかもしれませんが、全て否定しているわけではない。昔、存在して、今、失われつつある価値のいくつかは、今の人たちも求めています。ただ、昔はなかった価値のいくつかはどうしても欲しい。これが現状です。

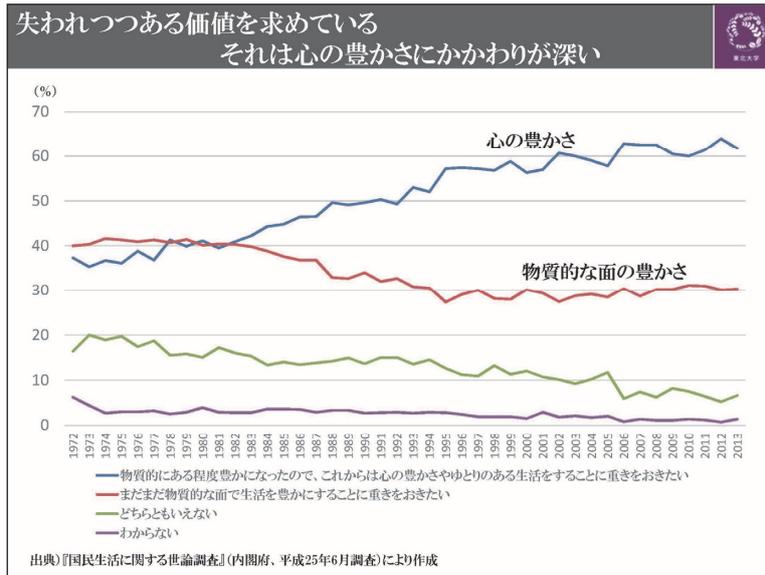


図-11

〈図-11〉 そして、ここに今、示しているのは内閣府の世論調査です。日本人が求めるものは1980年以降では、物質的な面の豊かさから、心の豊かさを求めるという人が増えています。先ほどの戦前の暮らしから見てみると、私の解釈はやはり利便性の追求、快適性の追求によって豊かさを失ってきた。その反動で、今、われわれは心の豊かさを求めているのではないか。私にはそういうふうにも見えるわけです。



図-12

〈図-12〉 最近、東北の岩手県北上市のプロジェクトをやっています。そこの口内地区では「口内傘」という唐傘を作っていました。こういう傘です。この口内傘の特徴は頑丈で長持ちです。風雨が強いところだったので、ものすごく持つ柄が太くて頑丈で壊れにくい。長く使える。それまでの唐傘は結構すぐ壊れていたそうです。原材料はほとんど地産材、口内地区でとれたものを使っていました。

この傘を作り始めたのは天明の大飢饉、1783 年ごろです。そのころ武士が副業として始めました。その後、天保の大飢饉で 1833 年、飢饉が再びやってきました。彼らはこの傘作りをやっていたので餓死する人が一人もいなかったそうです。「副業の強さ」と書いていますが、この口内傘にみられる価値に、「物を大切にしている」「物に愛着がわく」「自然を感じられる」というものがあります。これらは先ほどのグラフで示されていた、今の人々が求めている要素で、戦後、失われつつある要素なのです。

では、この口内傘を復活させて、みんなで傘をさしましょうという話かということ、違います。そうではない。「物を大切にしている」「物に愛着がわく」「自然を感じられる」という概念は満たす。けれども将来のニーズも満たす必要がある。それをどのように構築していくかを考えないといけないのです。

■ 未来のライフスタイルの方向性

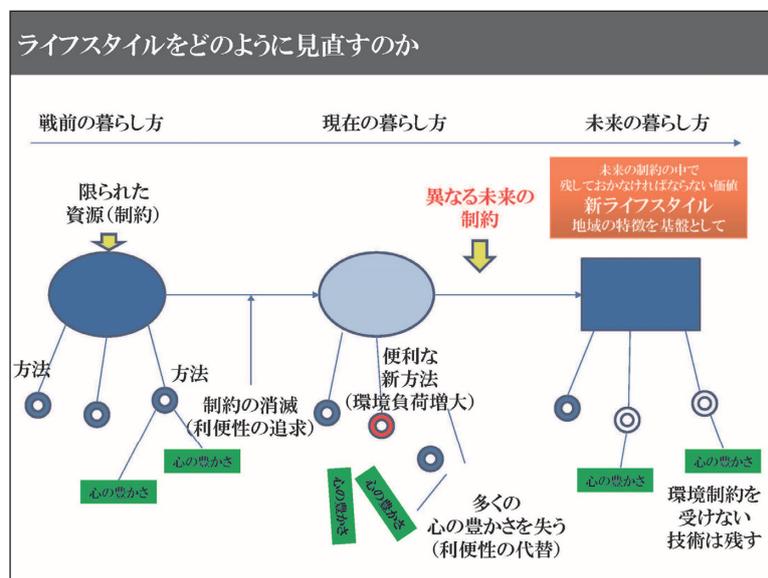


図-13

〈図-13〉 ここで少し整理したいと思います。ずっと見てきたこの戦前の暮らし、これはものすごく限られた資源制約の中、心豊かになるように方法を考えて暮らしていました。それが利便性を追求して制約が取り除かれたことによって、一緒に心の豊かさもぽろぽろ落ちてしまった。これが昔から現在にいたるまでのプロセスです。

では、将来はどうか。われわれの未来は、今までとは異なる制約、地球環境問題という制約を受けることとなります。その中で、いかに心豊かに暮らすかを考えなければいけない。もちろん昔の知恵を使えるものもあるかもしれませんが、ただ、そっくりそのままとはいかないでしょう。大事なことは、今までとは異なる未来の制約に基づいて、できるだけ環境負荷を与えない技術を使いながら、未来を作っていくことなのです。

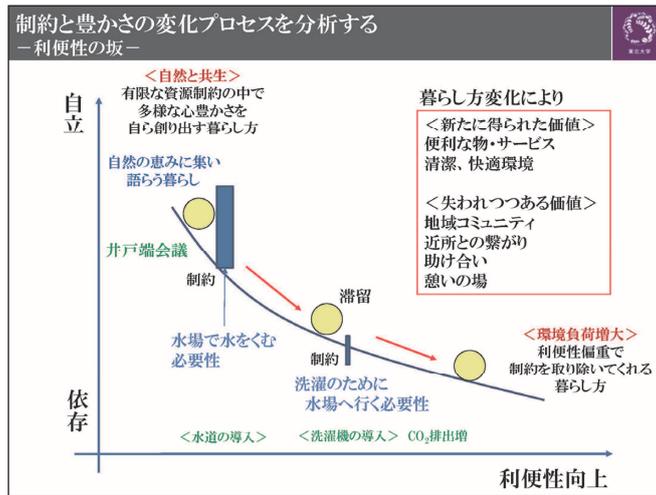


図-14

〈図-14〉 これをもう一つ別の軸を入れて考えると、より理解が深まると思います。上の縦軸が自立、下が依存の方向です。戦前の暮らしは井戸端会議をやっていて、自立した暮らしをしていました。ところが水道が導入されました。水をくみに行く必要がなくなった結果、便利になって依存する方向へ坂を下って行きます。そして今度は洗濯機ができました。洗濯機ができるとさらに便利で、依存する方向に向かったわけです。われわれはこういうプロセスを経て、その代わりに環境負荷を与える方法で制約を取り除いてきました。その結果、多くのことを失ってきたのです。

私はこれを間違っていると言っているわけではありません。戦前から現代にいたるまでの技術導入と心豊かさの関係がこういう構造になっているということを理解する必要があるということです。だから、われわれがもし失いつつある価値を求めるのであれば、この坂を上っていけばいいわけです。

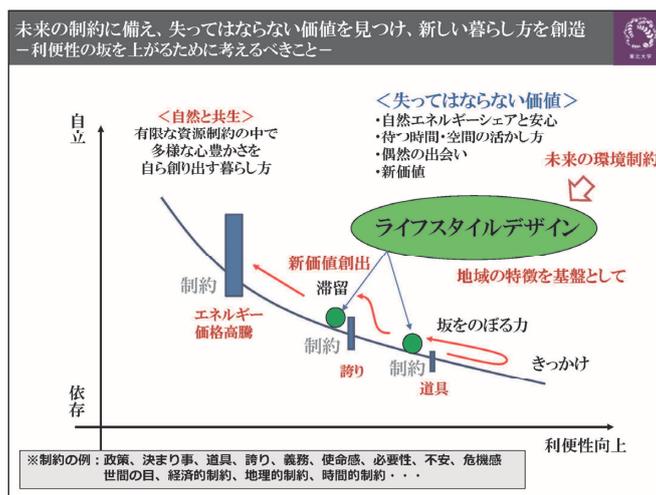


図-15

〈図-15〉 まずきっかけが必要です。なんらかのきっかけで坂を上っていく。多少不便でも自立して豊かさを得ようと、こういう方向へ向かっていけば。そうしたら、昔の井戸水とまでは行

かなくても、豊かな暮らしになれるのではないか。つまり、この坂を上っていく方法を考えるということです。では、どこに上っていくのか。この緑色に書かれた部分、こういう途中でもいいと思います。途中まででも上がっていく方法を考えないといけない。そもそも、この途中というのは、どんなライフスタイルなのか。このライフスタイルをデザインしないといけないわけです。

■ バックキャスト思考によるライフスタイルデザイン

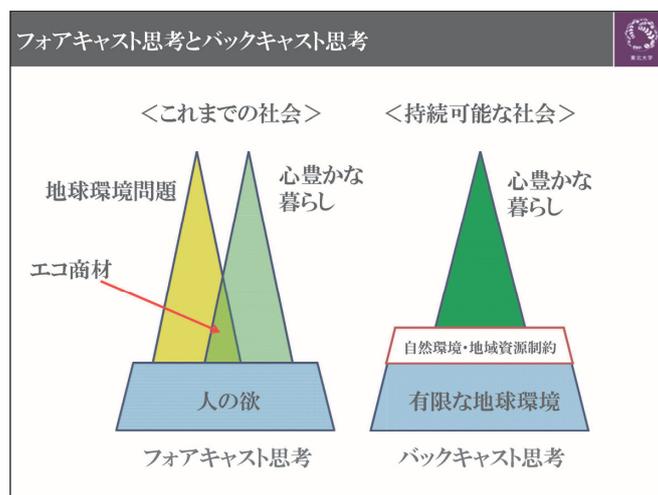


図-16

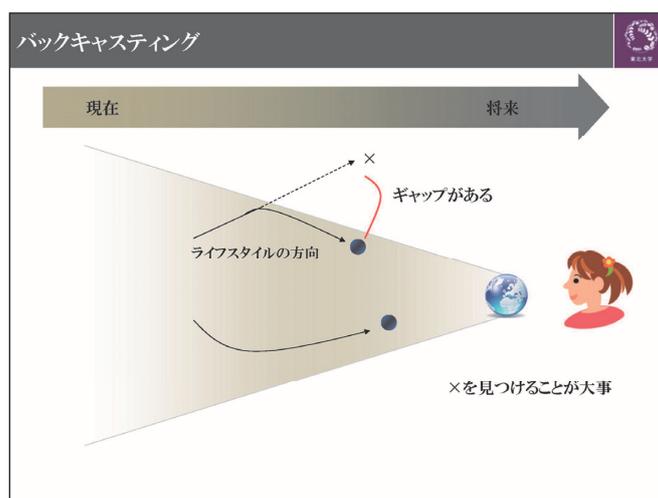


図-17

〈図-16、17〉 そのライフスタイルをデザインする方法を、私はこの10年間ずっと考えてきました。その一つの方法としてバックキャスト思考というものを使います。今までの考え方（フォアキャスト思考）は「人の欲」を前提として豊かな暮らしを考え、地球環境問題を解決しようとしています。ですので、図-16の左の重なった部分がエコ商材となって実現するわけです。しかし、環境問題に悪くても豊かな暮らしを認めてしまうとそういった商材が生まれてしまうので、全体最適ではない。

それに対してバックキャスト思考は、有限な地球環境を前提として豊かな暮らしを考えるので、全体最適になります。バックキャストというのは 1970 年代からイギリスで政策を作るのに使われていました。しばらく論文の世界からはなくなりましたが、また 1990 年以降、再びバックキャストもしくはバックキャストという言葉が出てきます。

方法としては、まず将来に身を置き、将来の制約を理解します。そして現在を見つめ直す。すると、「この方向はよろしくないね」「地球 1 個分の方はこっちですね」と理想と現実のギャップが見えてきます。このよろしくないギャップの埋め方を考えるのが、バックキャストです。バックキャストと言うと「予測」という言葉が思い浮かぶかもしれませんが、違います。予測ではなく「ソリューションを考えること」を、バックキャストといいます。

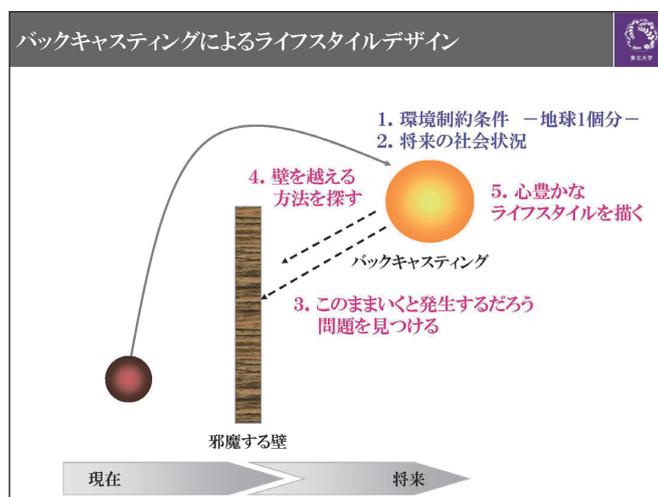


図-18

〈図-18〉 私はこれを使って全体最適のイノベーションを起こすために、バックキャストによるライフスタイルデザインという方法をずっと検討してきました。初期はこういうかたちをしていませんでしたけど、10 年間やってきて最終的にはこういうかたちがベストだと思います。

まず、環境制約条件を考えます。次に、その上で将来の社会状況をディスカッションします。これはグループでやることが多いです。その時点で自分が 2030 年とか将来にいる気になって、バックキャストします。すると、このままいくと発生するだろう問題が見つかります。この問題を見つけたら、その問題を解決する、壁を越える方法を探します。最後に心豊かなライフスタイルを描きます。この 1、2、3、4、5 を繰り返します。

私は今まで多くの企業とも共同研究をやって、おそらく 4000 個以上のライフスタイルを描いてきました。今年は 1 年間にたぶん 1300 個以上のライフスタイルを描きます。多くの企業でこのライフスタイルデザインの方法を使って、新しいイノベーションを起こそうとしています。

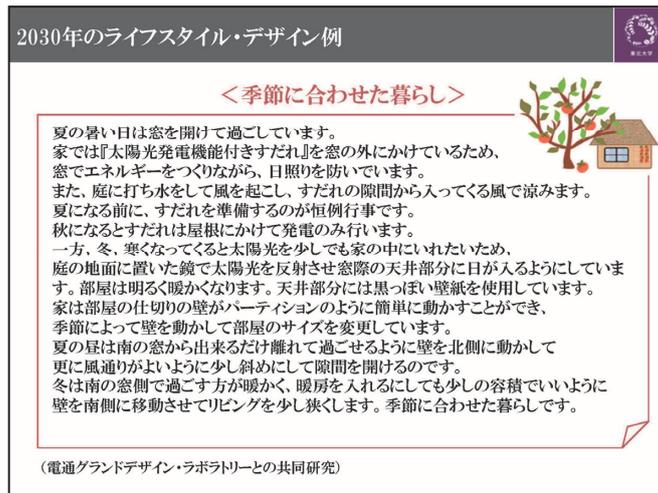


図-19

〈図-19〉 描くのは、例えばここに示したように「季節に合わせた暮らし」のようなライフスタイルです。今は季節に合わせない、外の気候に合わせない暮らしになっていますけど、季節に合わせた暮らしをするという新しい概念を導入すると、生活シーンが変わって見えてくるでしょう。このようにライフスタイルとその1シーンを文章で描くという形式で、私はやってきました。結構スキルが必要ですけど、最近は自治体と共同研究をやっていて、自治体の職員が普通にライフスタイルをデザインできます。

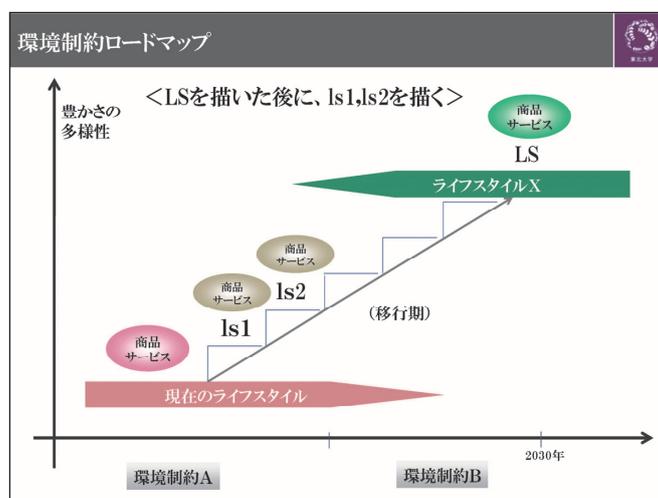


図-20

〈図-20〉 この方法を使って2030年のライフスタイルXを考え、そのXを実現するのに必要な商品・サービスというものを考えます。ただ、今は左下のライフスタイルにいますので、いきなりライフスタイルXにジャンプするわけにはいきません。やはり価値観がずいぶん違います。今までの制約のないライフスタイルと、制約の中の豊かなライフスタイルでは価値観が違うわけですね。

ライフスタイルXへ上がっていくために、「みんな、上がりなさい」と言ってもいきなりは上がれませんので、1段1段階を用意しないとイケない。このステップアップする小さなライフ

スタイルをls1、ls2 っって呼んでいますけど、ステップステップを作っってあげて無理なく上がっっていくるようにしないとイケない。こういう方法論です。

■ 社会受容性が高いライフスタイルの分析

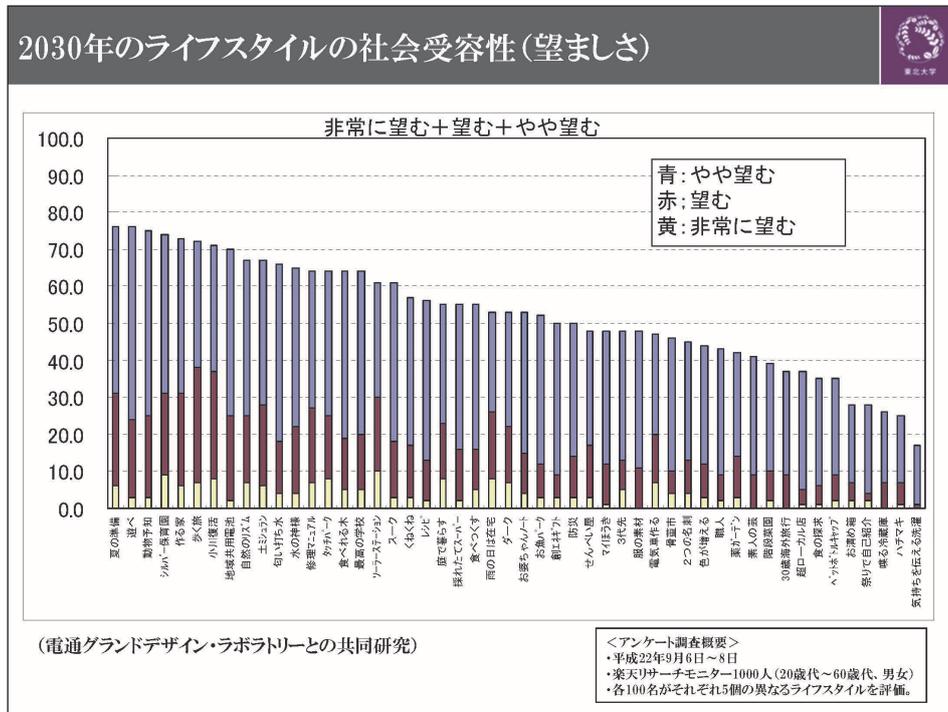


図-21

〈図-21〉 数多く描いていると、こんなことも解ってきます。2030年のライフスタイルを50個描きました。これは電通のグランドデザイン・ラボラトリーと共同研究をやったときのものです。社会受容性と言っていますが、描いたライフスタイルについて「これをやることを望みますか」とアンケートで聞くと7、8割ぐらいの人が「望みます」と答えるライフスタイルがいくつか出てきます。ところが、右のほうのライフスタイルは2割ぐらいの人しか「それ、やりたいです」と言いません。

こういうように同じグループが描いても社会受容性が高いものから低いものまであります。低いものが悪いというものではありません。今の価値観では低いものは到底受け入れられないと言っているだけであって、将来、制約がかかれば受け入れられるかもしれません。逆に言うと、左の方はすぐにでも導入できるかもしれません。



図-22

〈図-22〉 描いたライフスタイルを学術的に分析したいと思って物差しを作りました。「評価グリッド法」という、山の景観などを評価するときを使う方法論を使っています。

今の人たちは、ライフスタイルの良しあしを決めるのにここに挙げている40個の価値観、軸で判断をしています。まだ研究途中ですけど、おそらく多くの人が40個のうち6個か7個ぐらいの軸を自分で選んで、その軸が含まれているかどうかでライフスタイルの良しあしを決めているようです。

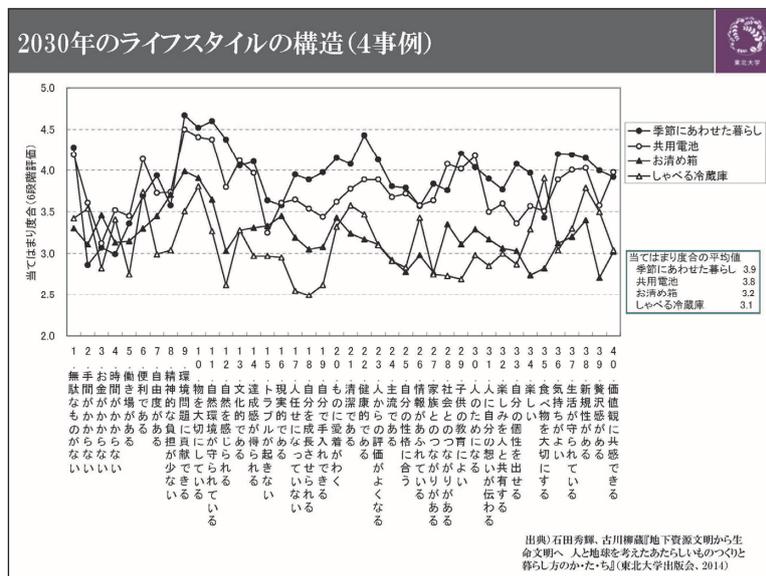


図-23

〈図-23〉 この物差しを使うとライフスタイルが定量的に評価できます。このグラフで示されているのは4種類のライフスタイルです。ぎざぎざがバラバラですね。ライフスタイルに含まれている要素というのは、それぞれものすごく違います。

2030年のライフスタイルの構成因子と社会受容性



クラス番号 (望ましい順)	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子	「望ましい」※ と回答した人数 の割合の平均 (社会受容性)
クラス1	社会と一体	自然	自分成長	利便	快適	自然・健康	63.6
	27 30 36	11 9 12	18 17 16	4 2 3	33 35 8	21 12 35	
	3.85	4.18	4.01	3.30	3.93	4.20	
クラス2	自然も物も大切	楽しく共感	利便	清潔・新規	自分成長	-	57.3
	9 10 11	33 31 32	4 2 6	20 37 23	18 17 16		
	3.92	3.69	3.34	3.59	3.56		
クラス3	楽しく贅沢	自然	利便	自分・愛着	-	-	52.4
	33 38 40	11 9 12	4 2 3	18 19 17			
	3.49	3.79	3.10	3.62			
クラス4	一緒に快適	利便	自然も物も大切	一緒に愛着	労働	-	38.7
	33 35 31	4 2 3	11 12 10	19 18 30	5 27 29		
	3.38	2.94	3.08	3.36	3.40		
クラス5	自分成長	清潔・健康	自然も物も大切	利便	楽しく共感	-	32.8
	17 18 16	20 21 38	9 10 11	4 3 2	33 32 31		
	3.08	3.89	3.34	3.25	3.08		

※「望ましい」とは「非常に望む」、「望む」、「やや望む」とした人数の割合の平均。
 因子の下の数字は、各ライフスタイル評価因子番号に対応しており、左から因子負荷と量の高いものを上位3つ記載した。
 3段目の数値はこの因子負荷量の平均値である。
 〈アンケート調査概要〉
 ・平成22年9月6日～8日
 ・楽天リサーチモニター1000人(20歳代～60歳代、男女)
 ・各100人がそれぞれ5個の異なるライフスタイルを評価。

出典) 石田秀輝、古川柳蔵『地下資源文明から生命文明へ、人と地球を考えたあたらしいものづくりと暮らし方のかたち』(東北大学出版会、2014)

図-24

〈図-24〉 ただ、それらはだいたい同じようなかたちをして、およそ類似した特徴を持っているので、このように分類できます。そうするとどんなかたちをしたライフスタイルが今の人たちに受け入れられやすいかもわかってきます。

ここからわかったのは、例えば、「社会と一体、つながりがある」という要素が入っているほど、今の人たちは社会受容性が高い。それから「自然」という要素が入っていればいい、「自分が成長する」という要素が入っていればいい、「便利」なものもいい、「快適」なものもいい、そして「楽しみ」が入っている方がいいと考えていることがわかってきます。

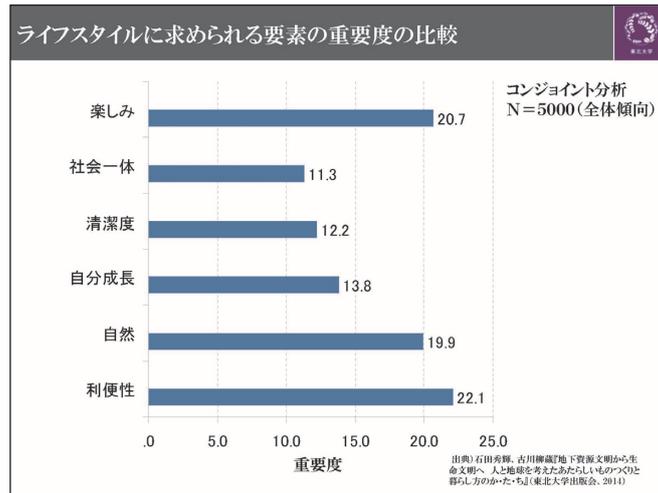


図-25

〈図-25〉 それぞれの要素の重要度が違うということもわかっています。もちろん人によって違いますけども、全体を平均すると日本人の多くは、まず「利便性」を求めています。これは想像できます。その次に「自然」と「楽しみ」両方を求めていますね。「自然」をこんなに求めていることに、実は私は驚きました。そのあと「自分の成長」、「清潔」と「社会と一体」という順に重要度が変わっています。今の人たちがこういう要素を求めていることがわかります。

このようにして得られた知見を踏まえれば、先ほど描いたライフスタイルにたどり着くためのステップを、どういうふうに設計すればいいかを考えることができるわけです。

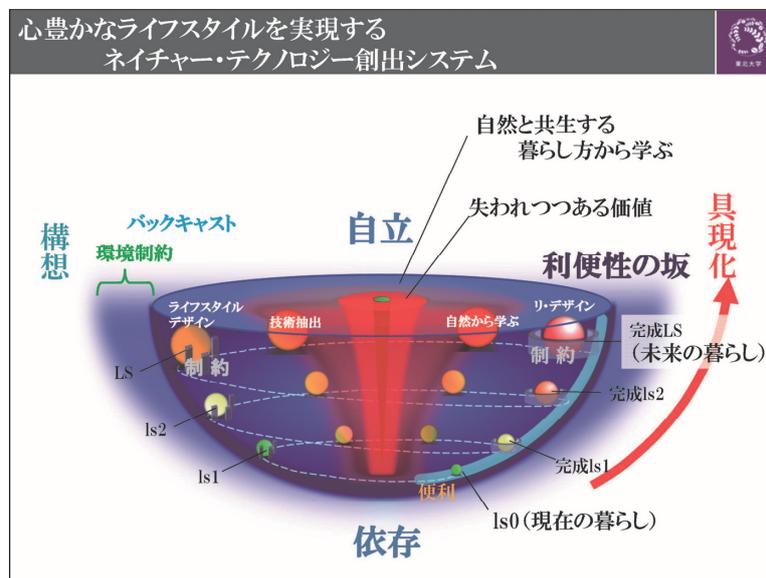


図-26

〈図-26〉 今日は時間がないので詳しくお話できませんけれども、さらにもう一つ新しい考え方を入れると、なおいいと思っています。今までお話した内容ですと、戦前の暮らし、つまり自然と共生する暮らしから、制約の中で豊かさを生み出す知恵を学びます。

もう一つは自然から学ぶ。自然界にも低環境負荷で合理的な技術が存在しています。トンボの

羽、蟻塚、生き物たちはいろいろな技術を持っています。その技術をさらに使えば、戦前の暮らしから学び、自然から学び、描いたライフスタイルを実現できるだろうと思っています。

ただ、一足飛びにはいきません。現在の暮らしがここ（右下）にあるとしたら、将来の環境制約を踏まえてバックキャストによりライフスタイルをデザインします。すぐそこには至りませんので、そこへステップアップしていくためのライフスタイルを考えます。

まず第一歩目のライフスタイルを実現するために必要な技術は何ですか。自然から技術を学びませんか。そしてリ・デザインして実現できる方法はどのようなものでしょうか。

こういう検討をして、スパイラルを上にあがっていく。すると、最終的には最初に描いたライフスタイルを実現できるだろうと。

この図は今までのプロセスを説明した図ですけど、ここで私が言いたいのはライフスタイル変革のイノベーションには結構ステップが必要だということです。今すぐ、あしたできることではない。

特に今、私は企業と共同研究をしてこのライフスタイルのステップアップをどう考えていくかという研究をやっていますが、ものすごく難しいです。けれど、そこまでしていかないと、将来の心豊かな暮らしにはたどり着けないだろうと思います。

■ ライフスタイルデザインの事例紹介

この 10 年間、私はこのような方法論を考えてきたわけですが、いくつか事例をご紹介しますと思います。ライフスタイルというのはとらえにくいですが、事例を見ていただくとイメージがつかめると思います。



図-27

〈図-27〉 まず、ずっと考えてきて、やはり大事なことだと私が思ったのは、ライフスタイルは人から押し付けられたくないですよね。「あなた、このライフスタイルにきなさい」と言われたら絶対嫌ですよね。ライフスタイルは自分が考えるものなんです。だから押し付けてはいけません。それを第一前提としないと失敗するだろうと思っています。

二つ目、最適なライフスタイルはその自然環境に依存します。したがって日本全体の心豊かなライフスタイルなどは存在しないわけです。伊勢志摩のライフスタイルと、宮城の沿岸部のライフスタイルと、仙台市内のライフスタイルは違うということです。したがってライフスタイル変革の重要な鍵を握るのは自治体です。もしくは自治体よりもう少し小さいレベルの地区が、重要な役割を果たさないといけない。

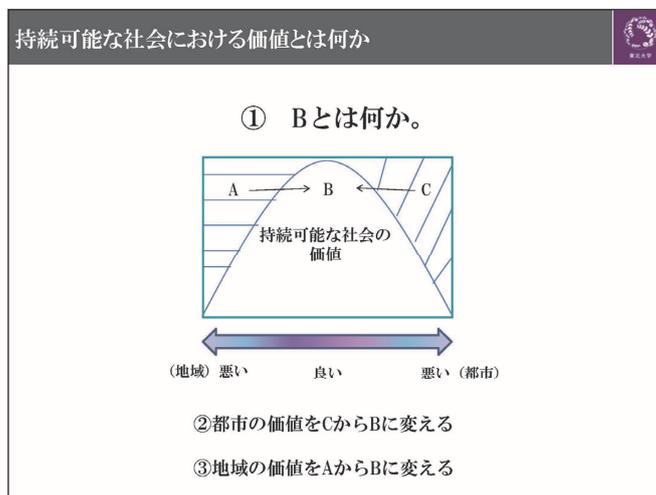


図-28

〈図-28〉 だから私は、このライフスタイル変革を促そうと思って、まず自治体にいろいろ声をかけました。今、進んでいるのは兵庫県の豊岡市、岩手県の北上市、秋田県秋田市、それから沖永良部島です。後ほどご紹介します。

深くその地方に入っていくとよく分かるのですが、そもそもというか、今の地方はまだ都会を、便利な地方を目指しています。もちろん市長のレベルは違うと思いますが、住民は「やはりもっと便利なコンビニが欲しいですよ」と言うわけです。でもものすごく豊かな自然があふれていて、豊岡市にいたってはコウノトリが飛んでいる。そういう中でも地方ではいまだに都会を目指してしまっている。

逆に都会、都市では何をを目指しているのか。私みたいに「ときどき自然を楽しみたい」という人がいます。地方から都会に移住してきて来て、何代かになっていると思いますが、都会人は都会の活気があって仕事がある暮らしを望むけど、ときどき懐かしい自然のある田舎に帰りたくなるわけですね。

このような現在の地方の価値観と、都市の価値観、これらは両方とも先ほどからずっと議論している「持続可能な暮らし方」に必要な価値観ではないのです。われわれはその間にあるもう一つの別の価値観（B）を両方が追いかけないといけない。地方のAも、都会のCも、このBという持続可能な価値観を目指していかないといけないだろうと思っています。

したがって、まずBとは何かを議論しないといけない。これこそ私の考えているライフスタイルデザインという手法で、われわれ今住んでいる人たちが将来の環境制約の中で、どういう心豊かな生活を望むのかがBなわけです。したがって、地方のAという価値観をBに変えないといけないし、都市のCという価値観をBに変えないといけない。これはまた大変なわけです。

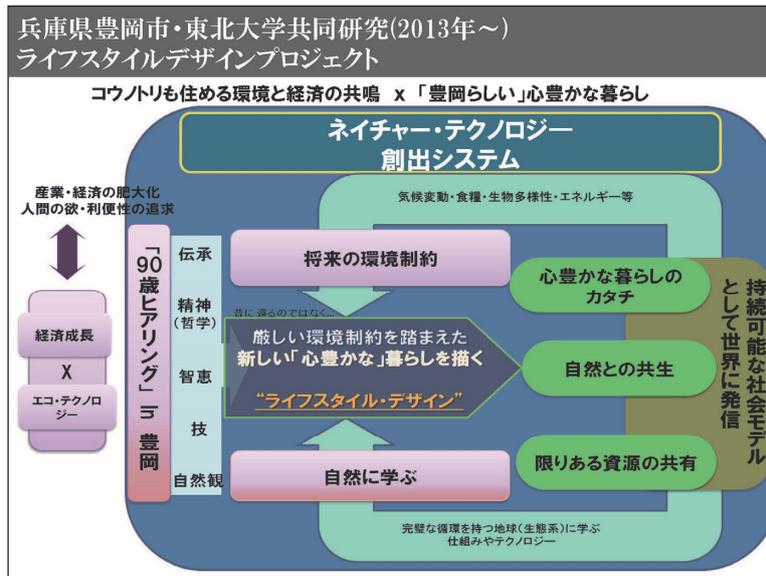


図-29

〈図-29〉 2013年に兵庫県の豊岡市でライフスタイルデザインプロジェクトを始めました。先ほどご説明しましたように、まず自治体が主導で動かないとこのプロジェクトは失敗するでしょう。したがって、私は手法を提供するだけで、彼らが2030年のライフスタイルを描いていく。こういうプロジェクトです。

まず1年目はトレーニングです。まず考えることになかなか慣れていない。便利なものを提供されて、自ら豊かさを生み出すというスキルが劣化している。ほぼ全員がそうですが、みんなで一緒に1年かけてトレーニングしました。豊岡市の職員7、8名が集まって、集中的にライフスタイルデザインをやったわけです。

私は結構厳しくて「1人、30個描いてください」と。7、8人いますので300個ぐらい集まり、そのうち良いのを選びすぐって最終的に70個描きました。ものすごく良いライフスタイルが描けました。

2年目は、その中から3つを選びました。

一つは資源循環をテーマにした心豊かなライフスタイル。二つ目は食を使って集うライフスタイル。三つ目は物作りのライフスタイルです。

それぞれ視点が違いますので、別地域、地区を選んで、具体的に検討していくというのが2年目でした。

そして今年3年目に入っています。お金が必要ですねとか、まずその地区の人たちの意見を集約しないとイケないですねとか、ものすごくゆっくり進んでいますけど、でも第一歩を踏み出していると思います。このようにして、豊岡市のライフスタイルデザインプロジェクトを進めています。

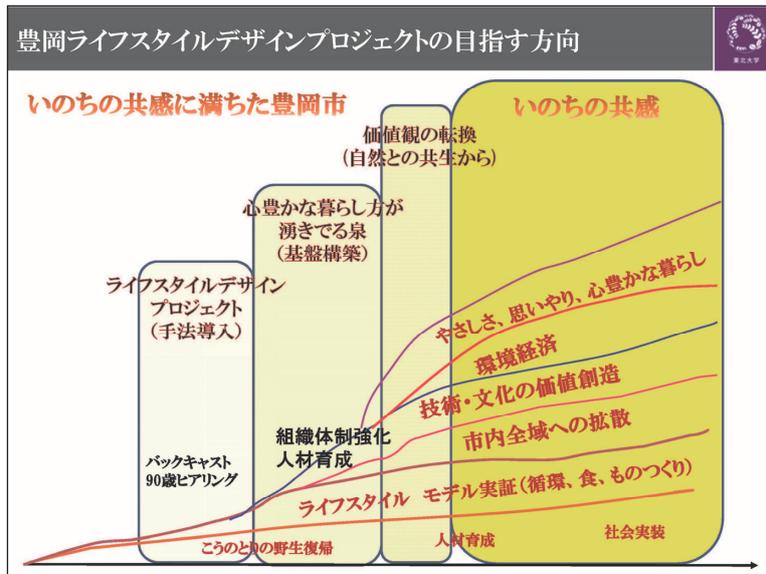


図-30

〈図-30〉 最終ゴールは、こんなイメージです。最初2年間でライフスタイルデザインプロジェクトとして、バックキャストや90歳ヒアリングという手法を導入します。自治体はそれを使いながら、自分たちの未来の暮らしを描いていくわけです。次の2年間で心豊かな暮らしが湧き出る泉を構築したいと思っています。今はまだ3年目にいますが、われわれが離れてもその手法を使って豊岡市から常に新しい心豊かなライフスタイルが湧き出てくる基盤を作ろうとしています。そしてそのあとは、そこで出てきた新しい価値観、先ほどのBという持続可能な暮らし方に必要な価値観が芽生えてきて、最終的には、市長のキーワードである「いのちの共感」を目指しているということです。

まだ実験ですけど、ものすごく力を入れてやっています。現場の人も、将来人口が減少し、税金も減少します。これでどうやっていくのか、コウノトリだけで本当に大丈夫なのか、真剣に考えています。彼らは動き始めています。私はそれを後押ししながら、自らライフスタイルを変えていく自治体を作ろうとしています。

秋田市 “未来の暮らし創造塾”



未来に向けて、どのような秋田らしさを残していくのが良いのでしょうか。益々厳しくなる地球環境制約や少子高齢化の波を受けながら、持続可能な社会の解を求めるためには、従来の考え方を変えなければなりません。今、私たちが考えなければならないことは、残しておかなければならない価値を未来の制約の中で考え、新たな暮らし方を創造し、地域の特徴を基盤とした新事業や政策を生み出し、これを秋田に普及していくことです。未来の暮らし創造塾では、世界的にも先進的な90歳ヒアリング手法とバックキャスト思考を用いて暮らしを変革するための第一歩を踏み出します。

平成27年度スケジュール：
 第1回 6月9日 講演会『秋田らしい心豊かな暮らしの実現に向けて』 古川柳蔵 塾長
 第2回 7月 未来の地球環境制約を考える
 第3回 8月 社会状況の議論・秋田の戦前の暮らし
 第4回 10月 ライフスタイルデザイン
 第5回 11月 ライフスタイルデザイン
 第6回 1月 ライフスタイル提案型事業・政策検討
 第7回 2月 講演会＋発表会

*デザインするライフスタイルの目標数は参加メンバー全体で100個程度

図-31

〈図-31〉 二つ目は秋田市の事例を紹介したいと思います。

秋田市は5年前からスマートシティプロジェクトをやっています、私はその委員として参加していました。そのプロジェクトはエネルギー管理システムを導入して、エネルギーの無駄の削減を目指し、それはある程度達成しました。

その委員に入っていた私は、「ライフスタイル」という言葉を強く言い続けました。そうしたら5年たってそれが実りました。よし、次の5年はライフスタイルをテーマにしよう、まず塾を作ろうと。僭越ながら私が塾長をやり、職員の研修制度を使いながら、ライフスタイルをデザインしていく。そこで出てきたライフスタイルを実現するために環境部も協力して、ほかにも関係する部署、部門が参加しながら実現に向けて動いていく。そんな動きになっています。

秋田市の人は真剣に考えています。高齢化の先頭を走っていますから真剣です。エネルギー管理だけではたぶん将来はないだろうと。われわれ自ら秋田市の暮らし方を考えなければいけない。そのようにして彼らは動き始めています。

食卓の集いスタイルの再構築 伊賀焼

いかに飯をうまく食ひ、いかに酒をうまく飲むか

料理が卓上で楽しめる事により、みんなが落ち着いて座って向き合う食事ができる。孫と一緒に蒸製つくりと食べることを楽しむ。食卓を囲む事で、人の輪が保てる。食卓を通してしつけができる。『卓育』

＜地域らしさ＞ 資源・技術
 ・その地の土の性質を活用（古琵琶湖の湖底の土）
 ・自然技術の応用（通気性、断熱、吸水、蓄熱）

作り手は、真の使い手であれ！

まっとうな食卓を支え実現するためにはどんな道具が必要か…ひたすら考え伊賀焼窯元の立場から知恵をしまり「こんなものがあつたらなあ…」というものを創るそれが私の仕事。だから「伊賀の典座たれ」を私のモットーにしています。

長谷優磁

盛器	下準備・食材盛付
貯蔵器	気化熱による鮮度保存、ラップ不要
調理器	少エネ・創エネ（遠赤外線）
食器	保温・盛り換え不要
洗う	ひとつの器
乾燥	ひとつの器
収納	「美」を備えたものづくり

一器多様



図-32

〈図-32〉 次の事例は企業です。伊賀焼、長谷優磁さんは伊賀焼の7代目の方で、写真でお見せしているような物を作っています。

私、最近お会いして驚きました。長谷さんはこういう器を焼いているわけですが、最初の思いは、「最近、食卓が壊れている」。一緒に座って食べることがない。一緒に食べているのに、お酒を飲んでいるのに、席を立ちあがってキッチンへ行ってしまう。これはなんだ。食卓をもう一度復活させたい。食卓のスタイルを再構築したい。これが出発点にあります。

これは私が今日お話したライフスタイルデザインですよね。戦前の暮らしではないかもしれませんが、いいと思っていたものが今崩れ去ろうとしている。それを再構築したいというのが出発点です。

では、食卓再構築のために何をしたらいいか。伊賀焼ですから、鍋を使って何とかしたい。右の写真は「ふっくらさん」という商品ですが、いろいろな機能を持っています。驚いたのは、氷を中に入れるといいらしいのですが、ふたに水をかけて、伏せておくと、夏でも気化熱ですごく冷えたまま維持できる。そうするとお刺身を食べるのにいちいち冷蔵庫まで取りに行き、席を立つ必要はない。中央の徳利も面白い。こういうもの全てに、食卓に一度座って食べ始めたら、食卓を乱さないようにいろいろな素晴らしい細工がされているわけです。これは今売れているそうです。

長谷さんのモットーは驚きです。

「まっとうな食卓を支え、実現するためにはどんな道具が必要か…。ひたすら考え、伊賀焼窯元の立場から知恵をしまり、“こんなものがあつたらいいなあ…”というものを創る、それが私の仕事。だから『伊賀の典座たれ』を私のモットーにしています。長谷優磁もともとこういうことをモットーとされていました。

私はつい去年、長谷さんにお会いして、このモットーに出会いました。最初に、「まっとうな食卓を支え」とは、ライフスタイルデザイン。そして、「どんな道具が必要か…。ひたすら考え」とは技術抽出。先ほど青いお椀のような図（図-26）をご紹介しましたが、そのプロセスを経てい

ます。そして、「伊賀焼窯元の立場から知恵をしぼり」、これは自然の技術を使っているわけですね。伊賀焼の土は古琵琶湖の湖底の土を使っているのもので、ものすごく多孔質になります。その機能を使っているわけです。そして、「こんなものがあつたらいいなあ…」というものを創る、これがリ・デザイン。リ・デザインをすることで、今の人たちでも受け入れられる鍋を作っていく。

まさにこれが、ライフスタイルデザインをして、戦前の暮らしから学んで、商品開発をしている例の一つだと思います。



図-33

〈図-33〉 それ以外に、実はなかなか事例がなく、今、私のほうでも探しているのですが、宮城県の岩沼市の「Dao Tao」というレストランの事例です。

私もここで食事をしましたが、驚いたことに、この小さなおちょこ、これが金継ぎというか、割れたものを修復して、レストランに置いてあります。大皿が壊れたので継ぐというのはわかるのですが、数百円で買えるようなものを、こんなに丁寧に金継ぎをする。こういうものがあるだけで、レストランの空間がものすごく引き締まるわけです。本当にものを大事にしているなど。私の中ではそのレストランで食事をするのは、ものすごく心豊かだなと思いました。

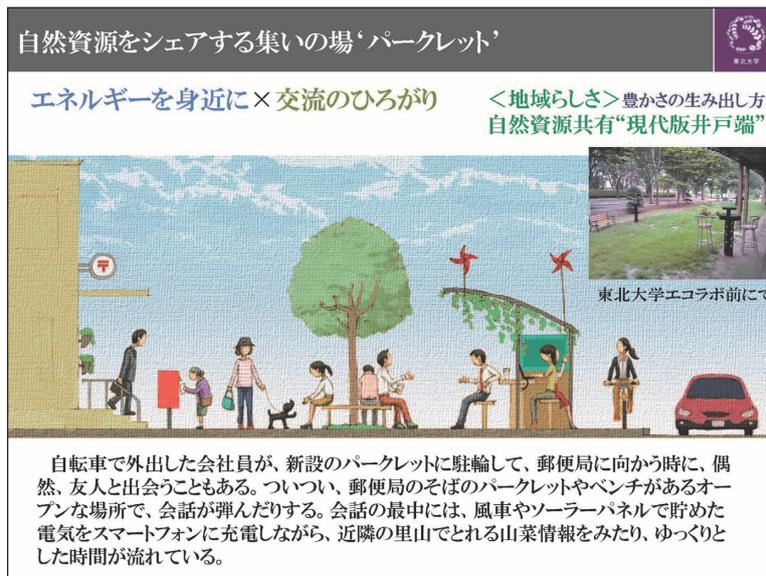


図-34

〈図-34〉 そして、最後の事例としてパークレットをご紹介します。自然資源をシェアする集いの場を作ろうという試みです。これは私が考えてやっていることです。

90歳ヒアリングをやって、私の心に一番グサッと刺さったのが、自然資源をシェアする暮らしです。燃料を共有する。今はないですね。燃料は電気とか別のものですから、当然、木をシェアするなんてあるわけないです。ただ、多くの90歳の方が、外の集いの場がないのが寂しいと言っている。何とかして外の集いの場を復活させて、壊れゆくコミュニティをもう一度再構築できないか。何とか自然資源をシェアする場を作って、そこに人が集うようにできないか。そういう実証試験をしています。

将来の資源ってなんだろうと考え、太陽光パネルで発電したエネルギーを蓄電池にためてシェアすることを考えました。そしてこれをパソコンとか携帯の充電に地域の人が自由に使えるようにする場をつくれれば、別の目的で立ち寄ったときについでに充電できる。昔の井戸端のような、現代版井戸端を考えたいわけです。

今、こういう格好になっています。東北大学のエコラボ、環境科学研究科の向かい側に怪しい黒い棒が立っていますけども、ここへ座って充電できます。でも、これは周囲に人はいません。今の制約の中では、誰もここに行かないわけです。当たり前ですよ。電気なんてコンセントにさせば、あっという間に充電できます。今の制約の中ではここに行く必然性がまずない。私は大学教員なので、学生に「そこへ行って毎日充電しないと単位あげないよ」と言うと、全員が行くわけです。それは極端な話ですけど。

いずれにせよ、今はまだ実験段階です。どういう制約をつければ人はそこへ集うのか。制約だけでは駄目ですね。ここへ来ると、こんな新しい価値観が体験できるんだというものを設計できなければ、永遠にここには人は集まらないと思います。

私はこれを都会でやろうと思っているのではなくて、宮城とか、地方のコミュニティが壊れているところで、このような集いの場ができればと思っています。都会で実現するためには、また別のニーズがあって、別のパークレットを設計しないとイケないと思います。

少なくとも今ものすごく緊急の課題として、地方のコミュニティの復活、再構築、そんなものを目指しています。まだ第一歩を踏み出したばかりです。ぜひ、仙台にいらしたときは、寄っていただければご案内いたします。季節によっては、ここで何か食べ物を育てようと考えています。

■ まとめ

まとめ	東北大学
<p>①なぜライフスタイルか</p> <ul style="list-style-type: none"> • 将来の環境制約を踏まえると、このまま今のライフスタイルを維持できない。 • 無駄の削減のみの対策は部分最適であり、心の豊かさが失われてしまう。 • 考える足場を変える必要がある。 	
<p>②戦前の暮らしに学んだこと</p> <ul style="list-style-type: none"> • 制約と心の豊かさは表裏一体 • 心の豊かさの創り出し方 • 利便性の坂 • 地域らしさとは何か 	
<p>③新手法の導入</p> <ul style="list-style-type: none"> • 未来の制約を前提とした地域らしい豊かな暮らしの創出(バックキャスト思考) • 失ってはならない価値をバックキャスト思考で検討(90歳ヒアリング) • 段階的変革(ネイチャーテクノロジー創出システム) 	
<p>④今、求められていること</p> <ul style="list-style-type: none"> • 地域の自治体における「心豊かなライフスタイルが湧き出る泉」の構築 • ライフスタイルの見直しの意識醸成 • 制約を心の豊かさに変えるテクノロジーの開発 • 心豊かなライフスタイルを提供するビジネスの展開 • 世界へこの方法論の展開 	

図-35

(図-35) 今日、私は、今なぜライフスタイルを考えないといけないのかということをお話しました。戦前の暮らしを調査した結果、いろんなことがわかりましたが、われわれが戦前の暮らしに帰るといって話ではありません。新しい手法を導入して、将来、未来の環境制約のもとでも心豊かに暮らせる。そんな暮らしをデザインしていかないといけないだろうと思います。

そのためには、鍵を握るのはおそらく自治体であると考えます。だけど自治体だけではできません。おそらくライフスタイルを見直さないとね、といったような意識の改革をいろいろとしなないといけないでしょう。実際、ライフスタイルは普通の生活者がかかわることですから、生活者が「今の無駄な暮らし、ちょっと問題だね」と思わないといけません。

そして私は難問だと思っていますが、「制約を豊かさに変える」テクノロジー。これは、おそらく大企業の知恵を使って突破していかないといけないだろうと思います。技術だけでは足りません。やはりビジネスとしてお金が回って、普及させる方法を考えないといけない。

利便性を追求する商品はもう坂を下るだけです。今、考えなければいけないのは、心豊かなライフスタイルを提供する、「ちょっと不便だけど、こんなに豊かだね」と坂を上っていく商品やサービスを提供することだと思います。

そして、最後ですけど、私は日本だけではなく、ドイツで今、この手法を導入して街づくりをしようとしています。手法論の提供であれば、世界展開できると考えています。日本古来の価値観は理解できなくても、彼ら自身の制約の中で、心豊かに暮らす方法を考えれば、彼らは豊かになれます。こういう方法論の展開を考えています。

短い時間でしたけれども、皆さまに私のやりたかったこと、ライフスタイル変革のイノベーションについて、少しでもご理解いただけたらと思います。

以上で話を終わります。どうもご清聴ありがとうございました。

【質疑応答】

参加者： 貴重なお話をありがとうございます。先生のご講義を聞いていると、例えばスマートシティなどの環境に配慮したテクノロジーがどんどん開発されることによって、社会と自然が共存できるということが1点と、あとそれに加えて豊かさという部分でそこに暮らす人々も豊かな生活ができる。その両立ができる社会というのが理想だという印象を持ったのですが、この豊かさについて1点ご質問があります。

戦前を生きた90歳の方にいろいろヒアリングをして豊かさを調査している資料を見て思ったのですが、例えばテクノロジーがどんどん進化していく中で、豊かさ自体も、概念も進化していくんじゃないかと私は思っています。

例えば、このコミュニティがある豊かさというのは、おそらく不便な生活だからこそ助け合うことが日常化してつくられるコミュニティだと思うのですが、50年後にはおそらくロボットが人間のパートナーとして人々の生活を支えるようになるんじゃないかと思えます。そうすると今のSNSのように同じ場所を共有しなくてもいいような、ネット上で架空の空間でやりとりができる豊かさもできてきていいんじゃないかと思うのですが、そういった豊かさの変遷みたいなものを、先生はどのようにお考えですか。

古川： その2050年の豊かさを考えるときは、2050年の環境制約、もしくはその暮らしの周囲の自然環境、それを抜きには考えられないと思っています。つまりその周りの環境が違くと豊かなものが豊かでなくなったりするわけです。

例えば戦前は蛍がきれいでした。蛍がいっぱいいました。それを捕って、ねぎの中に入れて持ち帰るわけです。それを蚊帳の上に置いて、夜、ねぎの中で蛍がピカピカ光るのを見て、豊かに思う。これを豊かだと思うのは、たぶん、ここの会場の方のどのくらいですか。半分くらいかな。半分くらいは、「いやあ」と思う。

どういうことかということ、戦前、昔は灯りがものすごく暗かった。夜なんか何もすることがない。寝るだけです。そんな時代だからこそ、蛍の淡い光が豊かさを生み出している。今の世界で想像してしまうと、蛍を捕ってきました。夜中に置いて眺めました。「いやあ、豊かかなあ」と思う。

このように豊かさというのは、まわりの自然環境とか、制約にものすごく依存するわけですね。それを考えると、2050年、まずどういう状況になっているかをイメージし、理解しないと、それが豊かかどうかわからないと思います。

そしてロボットが何かをしてくれる。「何をしてくれるのか」が、実は大事なんです。

「その状況の中でこれをしてくれるから豊かです」というのであれば、そのロボットはわれわれ人間に対して豊かさを生み出します。

そういうものだと私は思っていますので、一概に SNS が普及したから共有する集う場なんか必要ないです、バーチャルにやればいいですよというのは、もしかしたら今の価値観の考え方かもしれません。しかし、将来の環境制約の中ではどうなのかを考えないと、間違った方向に進んで行ってしまいうだろうなと思います。

参加者： 最後の方のスライドの、秋田県のスマートシティに取り入れた豊かさなどもあります。豊かさを調べるのに 90 歳の方のヒアリングで十分かどうかをおうかがいしたいです。もし他に統計を取らなければいけない選択肢があれば、ぜひそこもお聞きしたいと思うのですが。

古川： 私は戦前の暮らしを大々的に網羅的に調査をするだけでは十分だとは思っていません。ただ、そこには今の現在の暮らしの中に存在する豊かさよりもはるかに多くの豊かさがあると思っていまして、むしろ今の暮らし、現在の暮らしを調査するよりも、よほど多くの豊かさと制約の関係を見つけ出せるだろうと考えます。ただ、それで十分とは思っていません。われわれは新しい価値を生み出していきたいわけですよね。過去の価値は、過去の制約の中で彼らが考えたことであって、われわれの未来は、われわれが抱える制約の中で考えるべきことです。そういう意味で全然十分と思っていけませんし、それを生み出す手法としてバックキャストによるライフスタイルデザインを考えたのですが、それでも十分かどうか。そういう答えです。

参加者： わかりました。ありがとうございます。

参加者： 非常に面白い、興味深いお話をありがとうございました。僕も茶道とか、座禅とかをやって、全体的にシンプルでバランスがとれたものって非常に大事だなあと思っています。昔から受け継がれてきて残っているものに立ち返っていくことは大切で、90 歳ヒアリングは非常に素晴らしい試みだと思いながら聞きました。

これから技術とか、いろんなものも含めて、多様性の社会になっていくと思われま。一方で、先生がおっしゃったようにバックキャストを前提として、もちろん資源とかエネルギーとか、いろんな制限が加わってくるとは思うんですが、その制限を突破するようなイノベーションも同時に起こるかもしれませんし、かなり不確定因子が強くなると思います。その中で受け継いできたものの芯を通していくことも、もちろん重要です。

その多様性の発散と、個と社会が今離れていきつつあるような状態をどういうふうにまとめあげるのか。どういうふうにディスカッションしていけばいいのか。

例えば都会の人の考えと、山形県とか秋田県の人の考えは全然違うと思います。時間の流れ方も違いますし、自然とのかかわり方も全然違います。その中で、どういうふう to 多様性を維持しながら、作り上げていくのか。バックキャストの設定の仕方とか、そういう観点からお聞きしたいです。

古川： 今、私が最適かなと考えているのは、自治体ごとに心豊かな暮らしを描いてもらうことです。おっしゃるとおり、山形にとっての心の豊かな暮らしと、東京に住んでいる人にとっての心の豊かな暮らしは違うわけです。

今おっしゃった価値観の多様化が将来どうなっていくかは、実は私はあまり関心がなくて、価値観をどう作っていくべきかを考えているわけです。

少なくとも都会の人が山形の住民に対して、「こういう暮らしをしたらいいよ」というのではないと思います。山形に住んでいる人が「これ、やりたいね」とライフスタイルを描けなかったとしても、他の人たちは少しサポートはしても、彼らが決めたこと、これが豊かですと思ったことを、どう実現していくかを考える。それを各自治体で動き始める。最終的にはそれが価値の多様化につながっていく。こういうものをイメージしています。

参加者： その上で全体最適化も同時に達成するということですか。

古川： その上で、おそらく共通項が出てくるわけです。山形と宮城は多少似ているところもありますけれど。東北地方は似ているところがありますね。もし共通項があれば、その中で共通して技術開発をするべきものもあるかもしれないというイメージです。だから割とボトムアップでしか、この解は得られないだろうと今は考えています。

参加者： ありがとうございます。

■ このレポートは平成 27 年 6 月 29 日コートヤード・マリオット銀座東武ホテルにおいて行われた、第 134 回本田財団懇談会の講演の要旨をまとめたものです。本田財団のホームページにも掲載されております。

講演録を私的以外に使用される場合は、事前に当財団の許可を得てください。

発行所 公益財団法人 **本田財団**
104-0028 東京都中央区八重洲2-6-20ホンダ八重洲ビル
Tel.03-3274-5125 Fax.03-3274-5103
<http://www.hondafoundation.jp>
発行者 山本雅貴